

得る病状の限界に就て臨床例を挙げ論じたい。本問題は最も重要且つ困難な事であり更に長年月の検索を要すると考えるが一應これ迄に調査し得た事項に就き第1回の報告をする。

### 34. 産科領域に於ける抗結核剤に関する研究 (第1報)

(大阪市大)

藤森速水, 平井 修, 奥山通雄, 今井 進

妊産婦の結核性疾患に對し化學療法は虚脱療法と共に廣く用いられている。これら抗結核剤の妊婦及び胎児に及ぼす影響を詳細に検する事は重要である。にも拘らずこの間の消息を明かにした研究は寥々たるものである。余等は我教室年來の妊婦肺結核に關する研究の一部として抗結核剤として D.H.S.M., Pas. INAH を用い、マウス子宮運動に及ぼす影響を検し次で SM の母體血中濃度並に胎児及び附屬物への移行態度を検し、更にチピオンの妊娠母體及び胎児に及ぼす影響に就き検し若干知見を得たのでここに報告する。

先ず子宮運動に及ぼす SM Pas INAH の短時間作用の影響を剔出子宮及び生體子宮に於て檢した。剔出子宮は Magnus 法により主としてマウス子宮を用い各單獨作用、併用効果、妊娠非妊及び性周期との關係、2, 3 の性ホルモンの自律神経毒との關係につき檢した。3劑共高濃度に於ては運動の抑制がみられた。生體に於ける觀察は家兎を用い Trendelenburg 氏法により子宮を懸垂し同時に血壓、呼吸を描畫せしめその影響を檢した。

次に非妊婦、妊婦並に褥婦に D.H.S.M. 1.0g を筋注しその母體血、尿、胎児並に附屬物への移行量を川上・鳥居重層法により測定した。妊娠時期による母體、血中濃度の差異、尿中排泄量の變化、又臍帶血中、羊水中、胎児、胎盤、悪露、母乳中への移行状態を檢した。

最後に Tibion が妊娠母體及び胎児に及ぼす影響につき檢した。即ち妊娠各月の妊婦、褥婦に Tibion を投與し母體では、肝機能検査、血液像、その他 2, 3 の臨床検査により檢し、胎児では人工妊娠中絶娩出胎児を用い各臓器の Tibion 定量及び組織學的に檢した。又妊娠月の母體より胎児への Tibion 移行、乳汁中への移行も檢した。又妊娠動物に對する Tibion 移行量につき種々検討した故、これらの結果を發表せんを欲す。

### 35. 驅梅療法特に妊婦梅毒について

(東大分院) 橋本和人

近來各種驅梅劑の使用に依り梅毒治療特に早期顯症梅

毒には目ざましき進歩が見られたが、強力なる驅梅療法にも拘らず血清梅毒反應が頑固に存在する症例に遭遇する事が多い。我が教室に於ては主としてマフアルゾール短間隔連續注射、又はネオネオアセミン及びこれにペニシリンの併用法を實施して居る。先に我が教室の關が昭和23年より昭和26年迄は詳細に治療効果を發表して居る。之に引き續き昭和27年より昭和28年迄に經驗したる症例につき次の様な結果を得たので報告する。

#### I) 妊婦梅毒

研究材料としては當科外來を訪れし妊婦を採血し血清梅毒反應陽性を示せるものにつき行つた。昭和27年度28年度の妊婦の梅毒陽性率は次の如し。

	採血數	陽性者數	百分率
27年	678例	23例	3.4% (強)
28年	705例	19例	2.7% (弱)

治療實施せる妊婦梅毒は17例にして、先天性梅毒7例早期潜伏梅毒4例、後期潜伏梅毒6例である。注射總量はマフアルゾール最低1.14g、最高3.64g、ネオネオアセミン最低11.7g、最高16.95g、油性ペニシリン1200萬最高1500萬である。治療成績を一括すると分娩終了時血清梅毒反應陰性1例、弱陽性化2例、不變11例、不明3例である。治療したる梅毒母體より出生せる新生児について無治療のまま血清梅毒反應の變化を觀察するに、臍帶血採取せる12例中陽性9例ありたるも、1週間後には血清梅毒反應の變化が見られ、1カ月後には遅くとも2カ月後には全例陰性化している。治療をなせる2例中1例は妊娠8カ月終りより治療するも、治療に對して全く熱意なく治療不充分のまま自宅分娩し、分娩後2カ月に初めて來院し、血清反應を見るに陽性で臨床症狀としても全身に互る特に頭部の皮疹のある例であつて、之に對し油べ1月30萬筋注、總量690萬に及んだ。治療後2カ月ワ氏反應陰性を示し10カ月後も陰性を繼續して居る。

#### II) 非妊婦梅毒

治療せる非妊婦梅毒は25例で先天性梅毒6例、早期潜伏梅毒6例、後期潜伏梅毒13例である。注射總量はマフアルゾール最低1.78g 最高3.58g ネオネオアセミン最低4.65g 最高20.50g 油性ペニシリン最低600萬最高1800萬使用した。成績を一括すると早期潜伏梅毒に於ては陰性化3例、弱陽性化1例、不變2例である。先天性梅毒に於ては陰性化なく、弱陽性化1例、不變5例、後期潜伏梅毒に於ては陰性化1例、弱陽性化2例、不變10例である。

以上症例中以前に治療したるもの9例あるが、この内1例は以前2年間に互りマフアルゾール10.2g、油性ペニシリン1200萬注射すれどワ氏強陽性を示し、肝障礙にて治療を中止せる後期潜伏梅毒で、治療中止後1年當科來院したものであるが、當科にてマフアルゾール3.6g注射するも依然として強陽性を示す例がある。之は明らかに抗療性梅毒を思わせる。

以上の症例より妊娠中血清梅毒反應の陰性化は困難であるが、ある一定度の薬用量を注射すれば、たとえ臍帯血が陽性であつても2カ月後には陰轉化し異常なき新生児を得る事が出来ると考えられる。治療基準として必要にして十分なる最少量の決定は今後の研究に俟たねばならぬが、マフアルゾール2g以上、ネオネオアーセミン12g以上、之にペニシリンを併用すれば良いと考える。必要にして十分なる最少量への追求には、血清ワ氏反應の抗體價の變動を注視してより最少量へ近づき度いと考へ之については後日發表する豫定である。又抗療性梅毒については未だ眞に梅毒が治癒しないか、又は梅毒は既に治癒しているが血清の方に梅毒と直接關係なくカルデオライピン又は牛心アルコールエキスに反應する抗體が残存するものと考えられる。之について血清ワ氏反應の抗體價の變動に關連してより正確な血清梅毒反應の術式が要請される。

次に新生児先天性梅毒にはペニシリンは副作用少く非常に有効で、短時日に陰轉化出来るが、成人先天性梅毒及び後期潜伏梅毒の陰轉化は非常に困難である。

最後に妊婦梅毒に於て分娩後の治療を奨むれど出産後異常なき新生児を得るや治療又は血清ワ氏反應の變化觀察を中斷するものが多い。之は危険な事で患者にして梅毒なるものを認識させ、充分なる治療効果を擧げ得る様努力されねばならぬ。

### 36. 各種降壓劑の妊娠中毒性高血壓に對する治療効果(第2報)

(横濱醫大)

森山 豊, 安達健二, 宇佐美昭, 岩橋五郎  
宮崎節生, 秋葉幸良, 竹下俊雄, 發地良英

高血壓は晩期妊娠中毒症の諸症状中最も重要なものである。これに對する各種の降壓劑(TEA 鹽, ヘキサメトニウム鹽, Veratrum 等)の治療効果については、昨年の本總會に於て第1報した。更にこれらの諸劑についての例數を重ねるとともに、Ranwolfia serpentina, Hydrazinophthalazine 劑等を妊娠中毒症患者に使用して、

その血壓に及ぼす影響を觀察するとともに、腎、肝機能、眼底血管、並に血壓末梢血管等に及ぼす影響を検索した。特に子癇に對する降壓劑の効果を検討した。

#### 1. Tetraethylammonium 鹽

本劑は降壓作用が不確實で弱く、個體差が多く、また効果の持続も短く、副作用も多いので、治療的價値は少い。

#### 2. Hexamethonium 鹽

降壓作用は前者に比して確實強力で、持続時間も長い。たゞ効果は個人差が多く、脈壓の減少の多い缺點がある。また胎盤循環障礙による胎兒への悪影響も考慮せねばならない。

#### 3. Veratrum viride

これの靜注は強力な降壓作用があり、脈壓の減少も少く、効果の持続も比較的長く、恢復も徐々である。切迫子癇等で急速に降壓を望む場合に適し、効果を更に持続させるためには點滴靜注が良い。

#### 4. Ranwolfia serpentina

前者に比べて降壓の現われ方がおそいが効果の持続安定性に於て勝れている。

子癇又は切迫子癇に對しては、7例中4例に發作又は再發を豫防し、1例に一時的抑制効果があつた。他の治療法とともに、降壓劑を使用することは有効と考えられる。

かつ降壓劑は、單獨よりも、2種ないし3種の併用のほうが、さらに効果がある。

### 37. 妊娠中毒症を對象として行つた東京都心部居住者の妊娠分娩の實態調査

(都立築地) 竹内 繁 喜

妊娠中毒症調査委員會の依頼によつて、東京都中央区内居住者で、昭和28年度中に分娩した婦人の實態を調査し、次の様な結果を得た。

I. 参考事項 中央区は舊京橋區と日本橋區とが合併されたもので2つの保健所の管理に分れている。

	中央保健 所管内	日本橋保 健所管内	合 計
28年1月の總人口	103,054	65,121	168,175
28年度中の出生數	1,328	730	2,058
28年度中の死産數	131	62	193

#### II 出生についての調査

##### (1) 立會者介助者及び施設別

1. 醫師の立會いによるもの 1,437例(65%)

1. 病院醫院での分娩 1,414例